

## Guhyasamājatantra

## 研究おぼえ書

奥山直司

筆者はこれまで Guhyasamājatantra (GS) の文献学的研究に取り組んできた。本稿では特に GS の梵文字本の系譜に問題を限定して考察したい。

- GS の見在写本中、これまで依用し得たものは次の十二である。
- A Asiatic Society of Bengal 所蔵 (H.P. Sastri 目録 No. 64)。  
A.D. 1799 書写。
- B Oriental Institute, Baroda 所蔵 (Nambiyar 目録 No. 34)。  
書写時を記さず。
- C<sub>1</sub> Cambridge 大学図書館所蔵 (Bendall 目録 Add. 901)。  
書写時を記さず。
- C<sub>2</sub> 同 (Bendall 目録 Add. 1365)。A.D. 1866 書写。
- K 京都大学図書館所蔵 (未公刊の京都大学図書館所蔵梵文字本リスト No. 31)。書写時を記さず。
- L British Museum 旧蔵、現在 British Library 所蔵 (Bendall 目録 No. 539)。A.D. 1836 書写。
- P<sub>1</sub> パリ国民図書館所蔵 (Cabaton 目録 No. 134)。A.D. 1819 書写。
- P<sub>2</sub> 同 (Cabaton 目録 Nos. 49-50)。書写時を記さず。

- T<sub>1</sub> 東京大学図書館所蔵 (松濤目録 No. 435)。A.D. 1905 書写。  
T<sub>2</sub> 同 (松濤目録 No. 436)。書写時を記さず。  
T<sub>3</sub> 同 (松濤目録 No. 437)。書写時を記さず。  
T<sub>4</sub> 同 (松濤目録 No. 439)。A.D. 1838 書写。

これらはすべて紙葉に記されてゐる。文字は、B L T<sub>1</sub> が Devanagari。他の写本はすべて Nepali を用ひてゐる。

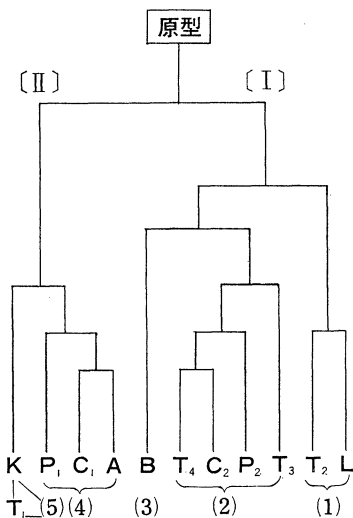
以下 GS の発達過程の第一段階とされる第一—十二章についてそれら十二写本の相互関係を考察してみよう。その方法は次の通りである。先ず諸写本を校合して異説を蒐集する。次に蒐集された異説を分類し、諸写本をいくつかの群に分つ。写本の分類は読み的一致不一致の度合を目安に行なう。例えば写本  $\alpha\beta\gamma$  の中、もし  $\alpha\beta$  に  $\gamma$  とは異なる共通の異説が繰り返し現われるならば、 $\alpha\beta$  は血縁的に親しい関係にあり、 $\gamma$  に対して  $\alpha\beta$  を一群にとりまとめることができるわけである。その上で、この様に分たれた写本群の内部関係を解明する。それは、特定の写本について他のすべての写本に一致しないその写本にのみ固有の読みを吟味することによって明らかとなる。即ち異説は本文が書写される度に増加する。そこで、血縁関係にあることが明らかかな写本  $\alpha\beta$  の中、 $\alpha$  には固有の異説が存せず、 $\beta$  には固有の異説が存するとすれば、 $\alpha$  を  $\beta$  の祖先と見なすことができる。他方、 $\alpha\beta$  双方に固有の異説が存するとすれば、 $\alpha\beta$  は共通の祖先から二支脈に分岐した姉妹である。

以上に述べた方法を用いて解明し得た十二写本の相互関係を予め図示すると次頁の通りである。以下にその経過を解説してゆこう。

読み的一致不一致の度合によって、諸写本は先ず二群に大別される。即ち (I) L T<sub>3</sub> T<sub>4</sub> P<sub>2</sub> C<sub>2</sub> T<sub>4</sub> B、(II) A C<sub>1</sub> P<sub>1</sub> K T<sub>1</sub> である。(I) は更に

(1)  $L T_2$ , (2)  $T_3 P_2 C_2 T_4$ , (3) B に細分される。(II)は(4)  $A C_1 P_1$ , (5)  $K T_1$  に細分される。

(1)  $L T_2$  は夫々固有の異読を多数有する。従って  $L T_2$  は姉妹関係にあると見なすことができる。(2)  $T_3 P_2 C_2 T_4$  は、読みの一致不一致の度合によつて  $T_3$  と  $P_2 C_2 T_4$  とに分れる。 $P_2 C_2 T_4$  は更に  $P_2$  と  $C_2 T_4$  とに細分される。 $C_2 T_4$  は夫々固有の異読を多数有する。従つて  $C_2 T_4$  は姉妹関係にある。(3) B はB固有の異読を多数有する一方、(1)  $L T_2$  (2)  $T_3 P_2 C_2 T_4$  に対しても共通の異読を併せもっている。その場合、Bは(2)とよりよく一致する。従つて Bは(2)と同一系統線から派生的に分岐したと考えられる。(4)  $A C_1 P_1$  は、読みの一致不一致の度合によつて  $A C_1$  と  $P_1$  とに分れる。 $A C_1$  は夫々固有の異読を多数有する。従つて  $A C_1$  は姉妹関係にある。(5) K と  $T_1$  は他の写本に対してきわだつた一致



を示す。その場合、 $T_1$ には固有の異読が多数存在する。かくてKから

$T_1$ への継続的变化が認められる。最後に、互いに系統線の異なる写本間で読みが混じり合う現象、

即ち混合 *contamination* を考察しておく必要がある。この現象は(I)の  $L T_2 C_2 T_4 B$ に見られ、そのあり方は次の二種である。(a) (I)の他のすべての写本と異なる異読があり、それが(II)の写本すべてで或いは一部と一致する。(b)本文の傍らに同一筆写者によつて異読が書き込まれており、それが(I)或いは(II)内の他の写本すべて、或いは一部と一致する。(a)の例はLに五、 $T_2$ に八、 $C_2$ に三、 $T_4$ に一、Bに十四存在する。混合によつて生じた読みは、 $L C_2 T_4$ では(II)のすべての写本に一致する。 $T_2$ では(II)のすべての写本に一致する例が五、 $A P_1 K T_1$ に一致する例が二、 $P_1 K T_1$ に一致する例が一である。Bでは  $A C_1$  に一致する例が八、(II)のすべての写本に一致する例が五、 $A C_1 P_1$ に一致する例が一である。次に(b)の例は  $T_2$ に四、Bに一存在する。その場合、 $T_2$ に書き込まれた異読が(II)のすべての写本に一致する例が二、Lに一致する例が一、(I)の  $T_2$ 以外の写本すべてに一致する例が一である。Bの一例はB以外の写本すべてに一致する。

この様に、 $L C_2 T_4$ には(II)の系統の写本との混合が予想され、Bには特に(II)とりわけ  $A C_1$ の系統の写本との混合が予想される。また  $T_2$ には特に(II)の系統の写本との混合が考えられる。しかし、それら混合の例は僅少であり、系譜を左右する程ではない。

以上の考察に基づいて、上に掲げる系譜を描くことができた。今後は、本論では依用し得なかつた梵文写本・藏漢両訳・註釈研究書における引用をこの系譜に組み込み、 $\odot$ の經典発達史の全貌を解明してゆきたい。(東北大学大学院)